

平成30年6月7日現在

機関番号：12601

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2014～2017

課題番号：26770057

研究課題名(和文) 東アジアからみた乾隆画壇の総合的研究

研究課題名(英文) Study on Qianlong Academy Court Painting from East Asian Views

研究代表者

塚本 磨充 (TSUKAMOTO, MAROMITSU)

東京大学・東洋文化研究所・准教授

研究者番号：00416265

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,800,000円

研究成果の概要(和文)：この研究は、18世紀の東アジアにおける乾隆画壇の位置づけと、その地域的、歴史的な成立の意味を考察するものである。そのために、中国や台湾に所蔵される豊富な作品やそのコレクションを支える概念、歴史的な変遷について考察を深め、その異同や相互関係を考察した。そのために今回の研究では、具体的な作品に加え、その付属品、表具、書付、著録、および模本制作といった、コレクションを支える思想を表現している媒体を特に注意深く観察することをおこなった。あわせて、それらの画像資料を収集、分析し、そのことによって日本と中国のコレクションと古物への全く違った視座が形成されたことを考証した。

研究成果の概要(英文)：This project focus on Qianlong Academy Court Painting and its collecting activity. Qianlong Emperors large number of collection not only influenced Chinese domestic antiquity, but also influenced other East Asian countries, like Edo Period Japan and Choson Period Korea until middle of 19th century. To make clear that the difference of Chinese and Japanese Collecting activity, this project examined closely painting object itself, and gathered many information and historical documents about Chinese painting which collected by 16-18th Japanese and Choson collectors. Especially, most important argument of this topic is how Kano School painters (also connoisseur of Chinese painting) has judged and how accumulated its connoisseurship knowledge in the Kano family. In conclusion, this stable System is the foundations of Japanese collecting Chinese painting, and it was closely related to the Collecting System of Qing Court.

研究分野：美術史

キーワード：美術史 中国 歴史 清朝 江戸 コレクション 宮廷 狩野派

## 1. 研究開始当初の背景

1644年に北京・紫禁城に入った清朝は、康熙、雍正の二朝を経て、1735年に即位した乾隆帝時代に最盛期を迎えた。清朝の画院は康熙、雍正朝に蘇州など江南の職業画家を北京に迎えることで成立し、カスティリオーネなど宣教師による西洋画法を取り込みながら独自の画風を確立した。東アジアにおける乾隆画壇の成立は、単なる清朝宮廷画風様式の成立を意味するのみならず、乾隆帝時代に完成した巨大なコレクションやその整理・公開事業と密接な関連がある。

すでに台北・国立故宮博物院や北京・故宮博物院では、乾隆帝時代の画院やコレクション活動について多くの展覧会や研究成果が発表され、特に『内務府造辦処活計檔』をはじめとする基礎資料の公開によって、その研究は格段に進歩しつつある。

本研究ではまず、これらの研究成果を十分に活用したうえで、さらにそれを、東アジア史的な視点からとらえ直すものである。特に、清朝の宮廷コレクションおよびその理念、整理方法、具体的内容を、日本や朝鮮のそれと比較することで、18世紀における乾隆画壇成立の意味を、単なる清朝宮廷史のなかだけではなく、広く地域史的な視点から再考することが求められている。

## 2. 研究の目的

研究の目的となるものは、特に清朝と江戸時代のコレクション形成の在り方を比較することである。従来までの清朝宮廷コレクションは、皇帝の贅沢や道楽としてとらえられてきたが、近年の研究ではその極めて高度な政治的な意味が解明されつつある。それでは、そのような同時代におこった朝鮮王朝や江戸時代のコレクションはどのような意味の差異があったのだろうか。清朝宮廷とはどのような関連性がみとめられ、どのような特色を各々は持っていたのだろうか。そしてそれらの特色あるコレクションは、近代以降の社会形成において、どのような機能を発揮していくのであろうか。それらの事象を具体的な作品に即して解明していくことで、その問いに答えることとしたい。

## 3. 研究の方法

研究の方法としては、作品調査と文献的調査を並行して行った。

作品調査については、江戸時代までに日本に伝来した作品を中心に、箱書や表具、書付といった付属品まで観察して資料の収集につとめ、また、江戸時代に出版された中国絵画、コレクション関連の書籍や印刷物をできるだけ照合することで、当時の具体的なコレクションの歴史的な観点や社会的コンテキストを復元できるように努めた。

また、特に近年では、台北や北京、上海、蘇州、天津といった博物館・美術館で大規模な主題別の展覧会が開催されており、それらによって新資料が公開されることが極めて多くなった。そのため、できるだけそれらの機会を把握して、資料の収集につとめた。また、『内務府造辦処活計檔』をはじめ、資料から関連する資料を抜粋し、その全体性をつかむための、文献的な調査を同時に行った。



徐揚「御製生春詩意図」(北京・故宮博物院)

## 4. 研究成果

研究成果としては、活字化できたものとして、まずは2018年8月に刊行予定の「徐揚『御製生春詩意図』と重華宮 清朝宮廷絵画の表現、場所と鑑賞者」(『國華』第1474号、2018年8月、予定)が挙げられる。本論考は、徐揚「御製生春詩意図」の絵画内容とその展示場所である重華宮における新年行事である茶会が密接に結びついていることを示したもので、清朝宮廷絵画の具体的な宮廷での使用およびその鑑賞者の問題を包括的に論ずることができたものである。

また、宋代宮廷の絵画制作を論じたものとして「道宣律師像・元照律師像の絵画表現とその制作集団」(論文)、明代孝宗年間の画院の具体的な表現技法について論じた「『本草彙精要』と明代宮廷画院」(論文)、北宋、日本、高麗の宮廷コレクションの差異について論じた「北宋文物の受容とその場 宋、高麗、日本の比較から」(論文)、乾隆帝時代の日中交流について新資料を交えて紹介した「赴日中國畫家：來舶清人及其交流活動」(論文)などを公刊することができた。

一方、学会発表としては、乾隆画壇における絵画制作とコレクションの関係を、日本における狩野派の鑑定及びコレクションの在り方の関係性を論じた「皇帝コレクションにおける模写・模造事業 乾隆帝の書画コレクションと狩野派」(学会発表)を行ったことがまずあげられる。この問題は、さらに來舶清人や琉球・福建などの周辺地域にまで

および、「境界と国籍 - “美術” 作品をめぐる社会との対話」(学会発表)として、東アジア地域全体の流動的なモノの移動の理解として発展した。

また、江戸時代と清朝コレクションの比較については、「近代中国学への架け橋 江戸時代の中国絵画コレクション」(学会発表)および、牧谿作品の江戸時代における受容、特に福井・松平家におけるケーススタディとして「平沙落雁図」(現・出光美術館蔵)の受容と松平家における特殊な意味について論じた「「牧谿」誕生」(学会発表)、元時代の画家である任仁発の、日本と中国における鑑定やコレクションの差異について論じた「任仁発と任月山 「琴棋書画図」(東京国立博物館)を中心として」(学会発表)、福岡・黒田家が足利將軍家以来の武家の典範を理解するために制作されたと考えられる「唐絵手鑑」の全体性としての編纂の意図について論じた「《唐繪手鑑(筆耕園)》與江戸時代中國繪畫知識的架構」(学会発表)などを発表し、模写や模造コレクションの問題およびその歴史意識の問題を包括的に考察することができた。また、蘇州の画家・沈桂が、島津重豪の高輪邸庭園を描いたと思われる「亀鶴坳詩画冊」が、薩摩・長崎・蘇州という具体的な人的ネットワークの中で生成したという「異国の風景を画いた清人画家 沈桂「亀鶴坳詩画冊」と島津重豪一」(学会発表)において、18~19世紀の東アジアの文化生成について具体的な視点を持つことができた。

また、清朝宮廷コレクションの理念的な淵源と言うこともできる宋代の宮廷コレクションについても引き続き考察を深め、特に「表具」が重要な意味を持っていることを論じ、その生成と崩壊(元代における表具のつけかえ)について論じた「南宋宮廷における北宋宮廷コレクションの記憶 北宋宮廷文物と表具の再評価をめぐって」(学会発表)、南宋社会における宮廷コレクション復興と仏教世界の関連について述べた「南宋宮廷コレクションと仏教世界の再生 士大夫社会の変容」(学会発表)を発表することで、清朝宮廷コレクションの中国史上での特殊な意味について考察することができた。これらの学会発表についてはまだ活字化されていないが、次年度以降に論文として随時公開していく予定である。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計6件)

塚本麿充「道宣律師像・元照律師像の絵画表現とその制作集団」『國華』1458号、2017年、27-36頁

塚本麿充「『本草品彙精要』と明代宮廷画院」『杏雨』査読無し、19号、2016年、87-132頁

塚本麿充「北宋文物の受容とその場 宋、高麗、日本の比較から」『日本美術全集 東アジアのなかの日本美術』査読無し、小学館、2015年、184-187頁

塚本麿充「兩個“趙令穰” 《秋塘圖》與《湖庄清夏圖》接受的中日比較研究」『千年丹青國際學術研討會論文集』査読無し、上海書畫出版社、2015年、121-146頁

塚本麿充「中国伝統文化の再編 清朝皇帝の世界」『台北 國立故宮博物院 神品至宝 展図録』査読無し、東京国立博物館 2014年、28-31頁

塚本麿充「千年企盼 日本人の中國繪畫新解 台北「國立故宮博物院 神品至寶」繪畫精品選介」「赴日中國畫家：來舶清人及其交流活動」『典藏 古美術』査読無し、第261号、2014年

塚本麿充「台北 國立故宮博物院 - 神品至宝 - 今を生きる文物たち」『趣味の水墨画』査読無し、2014年、64-70頁

[学会発表](計17件)

塚本麿充「近代中国学への架け橋 江戸時代の中国絵画コレクション」第11回 SGRAチャイナフォーラム 東アジアかたまた中国美術史学 北京師範大学(北京)、2017年11月25日。

塚本麿充「南宋宮廷コレクションと仏教世界の再生 士大夫社会の変容」メネストレル主催 國際シンポジウム 中世における文化交流 対話から文化の生成へ、大和文華館(奈良)、2017年11月18日。

塚本麿充「日本入宋僧俊芘與圓爾:佛教文物與南宋社會」兩宋書畫傳習與研究國際學術論壇 中國美術学院(杭州)、2017年9月23日。(中国語)

塚本麿充「「牧谿」誕生」特別展 茶の湯記念シンポジウム 茶の湯を語る ヒトから、モノから 東京国立博物館(東京) 2017年5月21日。

塚本麿充「異国の風景を画いた清人画家 沈桂「亀鶴坳詩画冊」と島津重豪一」瀬戸内の塩が育んだ近代東アジアネットワーク 児島、野崎家に集った「人」と「書画」岡山大学(岡山) 2017年3月15日。

塚本麿充 「境界と国籍 - “美術” 作品をめぐる社会との対話 」 アジア未来会議 SGRA チャイナフォーラム(北九州)、2016年9月29日.

塚本麿充 「南宋宮廷における北宋宮廷コレクションの記憶 北宋宮廷文物と表具の再評価をめぐる 」 フレームの超域文化学 世界認識と古典知 学習院大学 (東京)、2016年8月1日.

塚本麿充 「矢代幸雄と 1930-45 年代の中国美術研究」 美術史家矢代幸雄における西洋と東洋 東京文化財研究所(東京)、2016年1月13日.

塚本麿充 「任仁発と任月山 - 「琴棋書画図」(東京国立博物館)を中心として」 东亚文化交流史中的文学与图像 復旦大学(上海)、2015年12月15日.

塚本麿充 「北宋三馆秘阁与东亚的文物交流--以宫廷文物的观看、场所、流通为例--」 文史研究院 小型学术研究会 復旦大学(上海)、2015年11月.(中国語)

塚本麿充 「禅月羅漢図の時空 - 応夢羅漢図の伝播と変容 - 」 空間史学研究会 東北大学(仙台)、2015年10月20日.

塚本麿充 「『本草品彙精要』と明代宮廷画院」 第34回 研究講演会 杏雨書屋(大阪)、2015年10月17日.

塚本麿充 「徐揚「御製生春詩意図」と重華宮 - 清朝宮廷の正月行事と都市図 - 」 中国美術研究会 京都大学(京都)、2015年4月13日.

塚本麿充 「中国美術史における皇帝と士大夫の表象 可視と不可視のはざまから」 「第67回 美術史学会 全国大会シンポジウム」 「造形と見えないもの 様式論のために イコノクラスムを超えて 」 岡山大学(岡山)、2015年.

塚本麿充 「(唐繪手鑑(筆耕園)) 與江戸時代中國繪畫知識的架構」 創新與創造: 明清知識建構與文化交流 中央研究院 中國文哲研究所(台北)、2014年12月6日.(中国語)

塚本麿充 「如何展示故宮文物- 東京國立博物館的挑戰」 臺北藝術大學美術學院(台北)、2014年12月4日.

塚本麿充 「北京・故宮博物院本「清明上河図」と中国都市図の展開」 開館50周年記念シンポジウム「描かれた都、開封と京都」 林原美術館(岡山)、2014年10月5日.

塚本麿充 「皇帝コレクションにおける模写・模造事業 乾隆帝の書画コレクションと狩野派」 特別展シンポジウム「中国皇帝コレクションの意味」 - 書画における復古と革新 - 東京国立博物館(東京)、2014年7月5日.

〔図書〕(計1件)

塚本麿充 『北宋絵画史の成立』 中央公論美術出版社、2016年

〔産業財産権〕  
出願状況(計0件)

名称:  
発明者:  
権利者:  
種類:  
番号:  
出願年月日:  
国内外の別:

取得状況(計0件)

名称:  
発明者:  
権利者:  
種類:  
番号:  
取得年月日:  
国内外の別:

〔その他〕  
ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者  
塚本 麿充 (Tsukamo, Maromitsu)  
東京大学・東洋文化研究所・准教授  
研究者番号: 00416265

(2) 研究分担者  
なし